備える 3・11から 災前の策　第141回　広がる「黄色いハンカチ作戦」

近所に知らせる「大丈夫」

大地震の避難時に「わが家は大丈夫です」と示すため、自宅に黄色いハンカチを掲げる取り組みが広がっている。南海トラフ地震で津波の被害が懸念される三重県では、熊野市が積極的に「黄色いハンカチ作戦」の導入を進めている。（中村禎一郎）

海沿いに位置する熊野市の釜の平・丁塚地区。先月十八日、地区の集会所には朝から二十五人ほどの住民が顔をそろえていた。津波が来襲した際の避難計画を作成するためだ。

計画作りを推進する熊野市防災対策推進課の課長山本秀さん(56)らが、参加者を前に口を開いた。「今日は町を歩いて危険箇所をチェックしてもらう」

熊野市では一人一人が、それぞれ個別の避難計画を用意し、逃げる先やその場所までの経路をあらかじめ決めておく取り組み「Myまっぷラン」を採用している。

住民はいざという場合、それぞれMyまっぷランを基に逃げることになるが、「黄色いハンカチ作戦」は、実際に避難したかどうかを住民が互いに確認する手段として導入している。

十八日は、避難計画作りのため予定されている全四回のうち、二回目の集まりで、参加者は三班に分かれて地区内を歩き、津波避難ビルや崩れそうな塀の場所、車の通行量などを点検した。

山本さんら市職員は、地区の点検から集会所へ戻った参加者らに黄色ハンカチを示し、「避難の際にはこれを自宅に掲げるようにしてください」と説明。一家に一枚の黄色いハンカチを配った。

作戦では、住民らは災害で自宅を離れる際に、黄色いハンカチを外から見える場所に掲げて避難する。近所の住民は黄色いハンカチがある家の住民を捜す手間を省くことができ、全住民の避難に要する時間を短縮できる。

熊野市は黄色いハンカチだけでなく、「無事で自宅にいること」を示す「白いハンカチ」の導入も同時に呼び掛けている。

南海トラフで最大規模の地震があった場合、百八世帯の釜の平・丁塚地区は津波による一メートルの浸水が懸念されている。

熊野市は高齢化が進んでおり、地震の発生時に逃げ遅れを発見するために、互いの状況を把握する必要性は高い。

十八日の集まりに参加した釜の平・丁塚地区の住民山岡雅宣さん(78)は「東日本大震災や熊本地震で、この地区の地震を恐れる気持ちは強まった。頼りになるのはご近所だし、ご近所同士で集まってできることをやっていきたい」と話す。

釜の平・丁塚地区では、七月に予定されている三回目の集まりまでに住民一人一人がそれぞれの避難計画を市に提出。八月開催の四回目の集まりで実際に黄色いハンカチを使った避難訓練を実施する予定だ。

熊野市では、南海トラフ地震で避難が必要とされる地区が十五ほどある。そのうち九地区が、黄色いハンカチ・Myまっぷランを利用した避難計画を策定済み。釜の平・丁塚は市内で十地区目となる。

黄色いハンカチ作戦は、静岡県を中心に導入の動きが広がっている。ただ、三重県防災企画・地域支援課が把握する情報では、現在のところ県内で黄色いハンカチ作戦を取り入れているのは熊野市だけだという。

自治体は熊野市だけだと利用しない人が出てくるなどの課題があるとみる。

黄色いハンカチを受け取る住民ら＝いずれも三重県熊野市で

熊野 掲げて避難、安否確認素早く

上 集まった住民に黄色いハンカチ作戦の説明をする山本秀さん
下 地区内を歩きながら点検する住民ら

静岡・富士宮が発祥

災害の際に黄色いハンカチを掲げる取り組みは静岡県内や大阪府内で広がっている。富士宮では、避難していても自宅に残ることにしていても「わが家は大丈夫」の意味で使うとされており、利用の仕方はやや異なっている。

富士宮市では長期間にわたって黄色いハンカチ作戦が続けられていることもあり、市民に広く知られた取り組みになっているという。市危機管理局は「他の自治体が取り入れるのであれば、それぞれのやり方で黄色いハンカチを活用してもらえればいいと思う」との立場。

避難した家が黄色いハンカチを掲げることになっている。しかし、富士宮では、避難していても自宅に残る家が出てくるなどの課題があるとみる。

73年前の津波被害訴え

歴史に学ぶ ⑫

三重県南部の沿岸は、一九四四年十二月の昭和東南海地震で津波に襲われ、大きな被害を受けた。同県紀北町三浦地区には、昭和東南海地震後に防潮堤が建設されたことを記念する石碑が残っている。

昭和東南海地震は太平洋戦争中の情報統制で、被害が隠されたといわれる。このため、三重県では宝永地震（一七〇七年）などに比べて後世に被災を伝える建造物は少ない。

昭和東南海の津波は、三重県から和歌山県にかけて大被害をもたらした。戦時中で物資不足の折、復興は容易でなかったと伝えられている。

現在は二百五十世帯が暮らす三浦地区には、地震発生から十数分で津波が到達。六十六戸が流失し、二人が犠牲となった。

石碑は終戦をへた地震から十年ほど後の一九五三年、海沿いに防潮堤が完成したことを機に、三浦地区の役員らの尽力で建立された。

海抜一一三㍍、海から五十㍍の場所にある石碑は、台座を含めて高さ三・五㍍ほど。正面には「俗説に津波は百年目毎に来る」と刻まれている。

三浦地区の自治会長中野真文さん(78)は「津波の恐れがあるこの地区ではもちろん、東日本大震災で危機感が高まりました。震災以降、改めて石碑に子孫への気持ちを込めた先人に思いをはせるようになりました」と話す。

当時完成した防潮堤は老朽化しており、その外側に新たな防潮堤の建設が進む。

防潮堤すぐそばの石碑は、昭和東南海から七十三年となるも、南海トラフ地震に備える大切さを訴え続けている。（中村禎一郎）

昭和東南海地震後の防潮堤建造を記念して建てられた石碑＝三重県紀北町で

地域のつながり 導入の条件

三重大地域圏防災・減災研究センター 川口淳部門長

黄色いハンカチ作戦は、すでに避難した人の家を改めて見にくく必要がなくなり、避難の無駄を省く有効な手段。ただ、地域コミュニティーのつながりが強い地域であることが、導入できる条件だ。

そういう意味では、都会化が進んでいない昔ながらの集落が導入に適していると言える。住民が互いに顔を知らないような大地域での導入は難しいだろう。

例えば、津波警報が出た場合を考えてみる。黄色いハンカチを掲げて避難するのは、留守を知らせているのと同じだ。警報が出ても、実際には津波がやってこない例の方が圧倒的に多い。避難訓練でも住宅から人がいなくなる。「避難中に窃盗犯に留守宅を狙われたら」との不安は付きまとう。

そう考えれば、家人でない人が黄色いハンカチを掲げた家に近づいていたときに、互いに「怪しい」と感じられるくらいの地域のつながりが求められるということだ。

そういう地域ならば、避難する途中の住民が異変に気付くはずだ。逆に言えば、都市部で導入しようとすれば、強固なコミュニティーづくりから始める必要がある。

黄色いハンカチ作戦の導入は、コミュニティーカの高さの証明だ。

「備える」は毎月第一月曜日に掲載予定。次回は八月七日です。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています